はじめに

天理大学附属天理参考館学芸員
中尾　徳仁　*Norihito Nakao*

天理参考館（以下、当館）は、生活文化資料・考古美術資料など数十万点の資料を収蔵する国内有数の博物館である。当館の学芸部は海外民族室、日本民俗室、交通文化資料室、考古美術室の４室があり、それぞれ所蔵資料を分担して管理している。筆者は海外民族室に所属し、主に民国期の中国民具資料（玩具、版画、看板など）について調査・整理を続けている。

海外民族室が管理するのは、日本を除く世界各地の生活文化資料約３万点である。このうち中国大陸と台湾地域のものは約11,000点と３分の１を占める。内訳は、漢族関係の生活文化資料（以下、漢族資料）が約9,300点、台湾先住民関係資料が約1,800点となっている（2012年３月現在）。本連載では漢族資料のみを扱い、台湾先住民資料については触れないがご了承願いたい。

さて、各資料を紹介する前にこれらが集められた経緯について述べる。漢族資料の収集開始時期は古く、大正期後半には既に天理教の布教師や学校職員による活動が行われていた。1925年の８月から９月にかけ、天理教の二代真柱は朝鮮半島と中国大陸への巡教を行う。この時持ち帰った資料は同年10月27日から３日間、天理外国語学校２階の教室において展示された。これが「鮮満支旅行土産物展覧会」であり、漢族資料が初めて一般に公開された記念すべき日である。『みちのとも』大正14年11月号によると出展数は約300点で、生活文化資料の他に考古遺物等も含まれていた。

また、1930年の３月から４月にかけて行われた２回目の中国巡教で、二代真柱は中国各地を訪問する。山東省斉魯大学附属博物館「広智院」を参観した際、同行した平岩房次郎（当時の天理外国語学校教授）に対し以下のように述べた。

> 「うちの外語（中略）で講義する場合、その土地その処の言葉は勿論、風俗、習慣又は日々の生活上使用するもの等についても説明するはずだ。その場合、口で如何に上手に説いても、又巧みに絵にかいても、所詮、実物を見せるに及ぶまい。これからの旅先きで実生活に則したもの、珍しいもの等、可能な限り多くの参考資料を買い入れて持ち帰ること」（『平岩先生と中国語教育』平岩先生謝恩会編、1969年）

巡教中には平岩ら同行者の努力により多くのものが集められた。収集した資料は、一説によると当時旅行用具入れに使用されていた竹籠式の箱（現在のトランクにあたるもの）15～16個分にものぼったという。1930年４月25日より、それらを展示した「支那風俗展覧会」が天理中学校東控室で３日間開催された。『みちのとも』昭和５年５月５日号の記事には、

> 「陳列の品々は衣装を始め、日用品の一つ一つにも及び中には唐時代の美術工芸品など、又と得難いものもあって（中略）一般信徒はおぢば帰りのこよなきお土産と非常な観覧数に上っていた」

とある。展示物は各種偶像、灯火具、商売道具、生活用品、古代遺物等で、会場では中国服を着た学生が説明を行い、その他中国音楽の演奏があるなど、来館者を楽しませる工夫が随所にみられたという。３日間で約１万人が押し寄せ、大盛況であった。写真の「流し床屋の担い荷」もその時陳列された資料で、2012年現在は当館１階の中国コーナーに展示中である。

この「支那風俗展覧会」が大きな反響を呼び、展示物を保存・管理する施設の必要性が論議される。そして展示終了日の翌日（４月28日）、全資料を天理外国語学校の本館（現天理大学１号棟）４階中央の教室に移して「海外事情参考品室」とした。これが当館の始まりである。その後も漢族資料の収集は続き、2012年３月現在の所蔵点数は前述の通り約9,300点である。戦前は中国大陸で収集された資料が多く、戦後（1945年以降）は台湾地域収集の資料が徐々に増えていった。

以上より分かることは、当館創設以前から漢族資料の一部は天理に存在していたことと、生活文化資料の収集は中国大陸で初めて発案されたということである。これらは当館における漢族資料の重要性を示している。

ところで、当館以外にも漢族資料を所蔵する施設は多い。しかしそのほとんどは1945年以後に集められたものである。戦前の資料を持つ国内の博物館は、筆者が把握するところでは国立民族学博物館（大阪）、日本民藝館（東京）、倉敷民藝館（岡山）、東洋民俗博物館（奈良）など数館あるが、当館に匹敵する資料数を持つ施設はわずかである。筆者は比較研究のために他館で同類の資料を探すことがあるが、見つけることができない場合がしばしばある。また、国内では当館にのみ存在すると思われる漢族資料も多い。例えば1940年頃に北京で手に入れた約130点の看板は、現在では本家の中国でもまとまった数を見ることは難しい。

このように貴重なコレクションにも関わらず、残念ながらその内容は十分周知されていないように感じる。そこで本連載を通じて所蔵資料を紹介し、少しでも読者の関心を引くことができればと考えた。今回採り上げるのは膨大な資料の一部のみだが、これを機に当館へ足を運んで頂ければ望外の喜びである。

ここまで当館漢族資料の概要と収集された過程について簡単に述べた。次回からは各資料をジャンル別に紹介していきたい。

流し床屋の担い荷（天理参考館蔵）
1940年頃北京にて収集、高さ136㎝